

第一節 災害

第一項 南海大地震

昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日（土曜日）午前四時十五分二十六秒、突如として襲った南海大地震は、安政地震以来の激震であった。『理科年表』によると、震源は紀伊水道沖東経一三五度七分、北緯三三度〇分であった。高知県の大部分は震度五で、被害は四国・九州・近畿・中国及び中部地方の一部にまで及び、特に

表1 南海大地震の被害

	全 国	高 知 県
死者	1,330	670
傷者	3,842	1,836
行方不明者	113	9
住家	全壊	9,070
	半壊	19,204
非住家	全壊	2,521
	半壊	4,282
浸水家屋	28,879	5,608
焼失家屋	1,451	196
流失、沈没、破損船舶	2,349	816

（『南海大震災誌』）

高知・和歌山の両県が被害甚大であった。表1に示すように高知県の死者は全国の半数に達し、住家全壊家屋も半数を超えた。いかに大きな被害を受けたかがわかる。このほかに高知県の場合、交通網の損壊も大きく、道路損壊七一六カ所、田畑の浸水三三三〇町歩、自給製塩も全滅、橋梁や堤防の損壊は調査できないほどであった。県内でも海岸地方がひどかった。海岸でも地盤の弱い沖積層、特に人工的埋立地や盛り土をした所、氾濫のしばしばある河川流域、低湿地等が特に被害が甚大であった。中村市がその例で最大の被害を受けた。全壊一六二一、全焼一六三、半壊六九六、死者二七三に上り、四

第1節 災害

香南各町村の被害状況については、表3のようになっている。特徴としては、岸本や赤岡で家屋の倒壊、半壊が割合に多かった。家屋が砂丘上に建っているのでやむを得ないが、ただ大忍村の倒壊家屋については「大忍村岩田は田の中に盛土をした場所で基礎に不同沈下があったため、七棟の内四棟倒壊、三棟半壊という被害と死者二、負傷者二という人的損害をも蒙っている……」と東大地震研究所技師金井清博士が報告している。

津波の被害は、岸本地区はほとんどなかった。

義捐金

南海大地震に寄せられた義捐金と物資の救援は、北は北海道から南は九州からと全国的な規模で行われ、義捐

表2 香美郡下の被害状況

被害的	死者	傷者	者者	人数
人被害数	死	重	軽	6人
				7人
				10人
家被害数	全半破	壊	家	45戸
		壊	家	368戸
屋				8,014戸
流	失	船	数	40
海岸線沈降状況	部	落	名	地盤沈下
	夜	須	本	
	岸	岡	川	沈
	赤	吉		下
				50cm
				50~70
				50~70
				50~77
津波浸水区域	部	落	名	浸水家屋
	夜	須	手	約60戸
	岸	切	坪	
赤	井			
				床上30~70cm
				床下程度

（香美地方事務所資料）

万十川鉄橋の橋桁が落下した。

さて、香我美郡下の被害状況は、表2のとおりであった。

津波は、夜須町（手結・坪井・千切地区）で地震後一〇分たつて来襲。来襲回数は前後三回、間隔五分ぐらいで津波の高さ三―四m程度と認められ、最初海水が引いた後来襲している。

道路損壊は、美良布において山田・大枋間の道路が、崖崩れのため不通となったが、三日後には車馬通行ができる程度に復旧した。

表3 町村別被害状況
(昭和21. 12. 28現在)

	死者	負傷	家屋倒壊	家屋半壊	田畑浸水	罹災者
岡本	—	3	6	45	—	145
岸本	—	1	11	41	—	110
野大	—	—	10	42	—	140
山北	2	2	6	26	—	120
川東	—	—	3	—	—	3
川西	—	—	—	—	—	—
夜須	—	—	—	3	—	6
須古	1	2	4	80	20	350
佐吉	—	—	1	—	—	—
川吉	—	—	2	10	3	6
計	3	8	43	247	23	880

(『南海大震災誌』)

金の総額は、六一三万六九五五円四九銭に達したという。本県でも高知新聞社を中心に無被害地から義捐金を募ったが、香我美町域各村でも義捐金が集められた。

- 大忍村徳王子若一青年同志会 五〇円
- 同 山南青年団 三〇〇円
- 同 徳王子国民学校 一二八円五〇銭
- 東川村連合青年団 一一四一円
- 西川村長代理助役 一一三六円四〇銭
- 西川村興西川青年団 一〇〇〇円

と、尊い義捐金記録が残されている。

第二項 安政大地震記念碑

南海大地震直後に東京大学地震研究所の調査団が来高し、多くの調査が行われた。そのなかで金井清博士は震度及び震害について安政の地震との比較を調査し発表している。「南海地震は、安政の地震に酷似しているが、今次地震の震度の方が幾分小さい。高知においては安政の地震は『山上の墓石過半倒る』との記録があるに對し、この度は倒れたものは少数であった。建物の震害による比較は『安芸浦八分崩る』との記録と安芸町



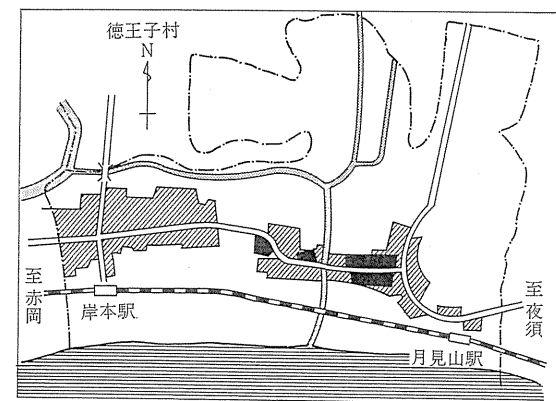
安政地震の碑

(現安芸市)の今次の被害と比べても、また兵庫県明石警察署管内、今市町(近畿)、大社町(山陰)、杵築町(九州)等の記録よりするにいずれも安政地震の震度が今回より大きかったことを示している」と。

香我美町岸本飛鳥神社境内に安政大地震の記念碑がある。高さ二・〇七呎、幅一・七呎の自然石で、碑の表面は「懲慙」の題名で、後世の人々のため、油断しないよう警告を刻んでいるが、金井博士の調査による安政の大震災と南海大地震との比較が明瞭に読み取れるのである。

懲 慙

諺に油断大敵とは深意あることにて仮初におもふべからず。安政元寅年十一月の事なりき朝五時頃常に見へぬ程の地震して岸本の浦塩のさし引十間余りの違あり又手結の港内も干揚りて鰻をつることなと夥し同日二度小震すこしばかりあれとさばかり驚く人もあらざりしを翌五日八時過大に震動すること三度七時過大雷鳴の如きどうどうと響してひとしく大地震す。こはいかと衆人驚く程こそあれ家蔵高屏器物の崩れ破るゝ音さらにいふ計なし。逃んとすれど目くるめきて自由ならずはう家を抜けるに津浪打来りて当地は徳善町より北の田中赤岡の西浜並松の本吉原は庄屋の門迄に及び又川尻の



(黒い部分が家屋損壊)

図1 岸本地区家屋損壊状況

波は赤岡神輿休のほとりまでにいたり、古川堤夜須堤も押切られて夜須の町家など過半流失すかくて人々は老を扶け幼を携へ泣叫びつゝ王子須留田又は平井大龍寺の山へと逃れ登りて命助かりぬ。此時国中の官舎民屋多く転倒し就中高知下町幡多中村等に失火ありて一円焼亡し凡そ怪我横死何百人といふ事なし。幸甚なるかな此地は神祇の加護によりて一人の怪我もなく彼山々に己家をかまへ日を経るに随ひて震もいさゝか穩に成しかは恵あまぬき大御代の忝を悦つゝ皆己々家に帰きぬ。抑宝永四年の大変は今を去ること百四十八年になりぬれば又かくる年数にも必変事の出こんなといふ人もありなめと世変はいつあらん事予めしりかたしされと常に冤あらん時は兎に角心せは今其変にあひて狼狽せざるへし今の人こゝ宝永の変を昔はなしの如くおもひて既に油断の大敵にあひぬ。さるによりて後世の人々今の變事を又昔咄の如くおもひて油断の患なからしめんためことよしを石に彫りて此御社と共に動きなく万歳の後に伝へんとふるひおこしたるは里人か誠心のめてたき限りにそありける。干規たま高見の官舎に祇役して俱に彼の變事に逢たれば其よし書てよの人々の乞ふにまかせてかくは記し侍りぬ穴賢

安政五年戊午季秋穀旦

徳永千規誌
前田有稔書
澤村寅次刻

徳永千規は土佐幕末の国学者で、郡方を務めた。

懲愆には、建設者三人の氏名も刻まれている。

安政の大地震から数えて九二年、約一カ月の誤差をもって同時刻に南海大地震が発生した。震度及び震害が酷似していることは先に述べたとおりであるが、碑文に見る先人の教訓は重い意味を持つものである。また、碑文によれば「一人の怪我もなく」とあり、南海大地震も最小の被害で終わったことを思えば、「天恵の地香我美町」と言っても過言ではない。

なお、参考までに高知県下の大地震を見ると、

- (1) 白鳳の大地震 白鳳一三年(六八四)年申冬十二月一四日
- (2) 慶長の大地震 慶長九年(一六〇四)十二月一六日
- (3) 寛文の大地震 寛文元年(一六六一)十一月一九日
- (4) 宝永の大地震 宝永四年(一七〇七)一月四日
- (5) 安政の大地震 安政元年(一八五四)十一月四日午前九時ごろ、五日午後五時ごろ
- (6) 昭和の南海大地震 昭和二年(一九四六)午前四時一五分二六秒

(『南海大震災誌』による)

となっており、高知県は約一〇〇年に一度、大地震に見舞われている。

第二節 治水

第一項 香宗川の治水

氾濫する香宗川



旧河川祇園井堰

香宗川（二級河川）は、高知平野の東端にあって香我美町記念坂（標高二九二メートル）に源を発し、中西川・山南川・山北川等の支流を合わせながら南流し、岸本地区大曲において大きく流向を変え、赤岡町街地の北部に沿って西流し、吉川村に至り鳥川と合流、さらに流向を東南に転じ、香美郡南部六〇〇メートルを灌漑して、土佐湾に注いでいる。

その流域面積は六〇・六平方キロで、幹流延長二〇・一九六結の中河川であるが、香我美町・野市町・赤岡町・吉川村の四カ町村の社会・経済・文化の基盤をなしている。

四国山脈の南側にある高知県は、俗に台風銀座とも呼ばれ、台風の襲来の多い多雨地帯である。香宗川流域もその例にもれず年間降水量二五〇〇ミリ以上で、県内では少雨地域に属しているが（県の年間降水量の平均は三〇〇〇ミリ）、香宗川の氾濫は年数回に及んでおり、その被害は甚大であった。旧岸本村村誌はその状況を次のように記している。「全村ノ耕土、其色



香宗川の氾濫（昭和29年台風23号による）

黒ク、質美ナリ、風雨ノ候ニヨリ波浪起ルトキ、大留川ノ末流堀川ト称スル処ヨリ潮水逆流シ、且香宗川ノ水溢レ来リ、潮水ト相会シ、耕田ヲ没ス、是ヲ以テ地質米麦ニ適スベシト雖モ其ノ成熟ニ至テハ甚宜シカラズ」とあり、徳王子村誌にも同様の記述がある。

流域の主な災害

香宗川は、平地部における川幅が狭く、蛇行による河床勾配の減少、多数の井堰による堰上げ、さらには南海大地震による地盤沈下等の影響を受け、雨が三粒降れば氾濫するとまで言われてきた。記録にある主な氾濫は次のとおりである。

(1) 大正九年（一九二〇）七月二七日の台風

この台風による雨は午前十時ごろから降り始め、翌日二十五日午前中降り続き、香宗川は大氾濫となり、赤岡町江見橋から上流堤防一〇間（一八メートル）、岸本・徳王子堤防約二〇間（三六メートル）、香宗川戸間堰（岸

(2) 昭和二〇年（一九四五）九月一七日の枕崎台風

本町明神付近）の決壊により、徳王子・岸本平野は湖水となり、出穂期にあった早稲・中稲が大被害を受けた。この台風は九月十一日にサイパン島南東部で発生、発達して名瀬西方で中心気圧九一〇メートル、暴風半径六〇〇メートルという非常に強い大型台風となり、十七日午後二時三十分ごろ鹿児島県枕崎付近に上陸、さらに北東進して広島付近を経て山陰へ抜けた。台風による豪雨で香宗川は氾濫、徳王子・岸本平野の美田二〇〇ヘクタールが湖水となった。

(3) 昭和二十二年六月の集中豪雨

香宗川の堤防が決壊し徳王子・岸本平野は水没、出穂期にあった水稲は収穫皆無となった。

(4) 昭和二十二年七月二二日の集中豪雨

不連続線による豪雨は、二十一日夜半から降り始め翌日午前中も降り続き、香宗川は、午前九時ごろから流域一〇カ所にわたり濁水が堤防を越すに至り、大忍・岸本・赤岡の各町村の農民は、堤防決壊を食い止めるため出動、被害を最小限にとどめた。

このように香宗川の氾濫は年数回に及び、その及ぼす被害は甚大であり、自然と人との苦闘の歴史であった。